

会員投稿

書と私(1)

太田市 永沼進

私が、書道としての書を習うようになったのは、昭和31年、当時宝酒造労働組合の文化部担当の執行委員をしていました。

文化部の活動として書道部を作ろうということになり、先生には、尾島町の安養寺に良い先生がいる聞き、お願いしました。週1回来ていただくことになり、部員を募集、50名くらいで発足、私もその時から師事し現在に至ったわけです。

当時は、役目柄率先して部員になったことで、今の私、人に教えることなど考えてもいませんでした。当然その頃は、書道界のことなど何も知りませんし、先生のことも知りませんでした。先生についてから、本を見たりするうちに、島田先生の書歴を知り、この辺には稀な先生であることがわかり、今にしてみればその好運な出会いに感謝の念でいっぱいです。

先生は、昭和16年、当時無住の荒れ寺だった安養寺に、東京の根岸から住職として就任。東京時代に書を吉田芭竹先生に師事、先生逝去により松井如流先生に師事、篆刻は石井隻石先生に師事。

たどってみれば、日下部鳴鶴(天保9年～大正11年：85歳)→吉田芭竹(明治23年～昭和15年：51歳)→松井如流(明治33年～昭和63年：89歳)→島田芝香(大正3年～現在：85歳)となり、日本書道界・近代書道における一流人脈の流れといつても過言ではない先生です。ですから昔流に、流派でいえば、私たちは「鳴鶴流」ということになります。

なにしろ、50名からの生徒、学校を出てから筆などは持ったことはない、初めての人ばかりですから、楷書の基本からお願いしたところ、点・横画・縦画・とめ・はね・折れ・左払い・右払いと、まったくの初歩から教えていただきました。

その時からの弟子は、現在3、4名になってしましましたが、今ではお蔭でそれぞれ後進の指導にあたっています。

最近、また稽古ごとがさかんですが、当時も戦後10年、やっとどうにか生活にゆとりができ、趣味を持とうという気運になった時だったのでしょうか。組合が主導して文化活動も盛んになり、運動部では卓球、庭球、野球部などができる時代でした。絵画部もあり、私は絵画部と書道部に入っていました。(つづく)



会員投稿

書と私(2)

太田市 永沼 進

小学生の頃から運動は不得手で、学校行事で運動会は楽しみだったという人が多い中で、私は運動会の時期になると憂うつで、かけりっこは小1、小2の時は出ましたが、小3からは、その時になるとさぼってかけたことがありませんでした。

家の者、近所の人が、応援に見に来ているのに、びりっけつの方ではどうにもたまらないことでした。さいわい、プログラム、時間の関係で、1人くらい居なくてもわからず、どんどん進行してしまい、先生にも、みんなにも不参加を気づかれたり、とがめられたりしませんでした。

当時、1等賞はノート、3等以下は鉛筆1本がいただけました。運動会が終って帰りがけに、先生が1本、私にだけそっと呉れました。

今でいえば文化祭でしょうか、当時、展覧会があり、大人は農産物などの品評会と同時に、生徒の習字と図画が飾されました。これは私の楽しみな行事で、良い作品には金・銀が貼られ、私の作品にも金や銀がいつも貼られ、銀のときはがっかりしたものです。戦後、定時制高校ができ、早速入学。太高定時制27年卒ですが、選択課目の絵と書では、楽しみながら単位が取れたのが思い出されます。

楷書の基本が終って、古法帖の中から智永の真草千字文を習い、競書誌は名前が「書法」から「書声」にかわり、現在に至っています。かつて定時制高校の恩師の教えの中に「何かひとつのことにも10年打ち込んで見よ。自分のものを持つことは人生に非常にプラスになる」との言葉がありました。先生自身も専門の外に油絵をやり、ろうけつ染めは帯や着物まで手掛けるほどで、近所の娘や奥様に教えていました。

私の書も、この
言葉を実感として
味わっている今日
この頃です。

しかし、これま
で続けられたのも、
良い環境に恵まれ
た、の一言につき
ると思います。

その第一は何ん
といつても島田先
生という良い師に
恵まれたことです。

(つづく)



作品を制作中の永沼さん

会員投稿

書と私 (3)

太田市 永沼 進

第13回(秋季)グラウンドゴルフ大会

全員で一緒に楽しむ月曜日

顧みると、あつかましくも楷書もろくに身につかないうちに、行書そして草書、はては隸書を、仮名をと、いま思えば厚顔の至りで、次々と勝手に教えを乞い、また篆刻をやってみたいといえば印材まで用意をしていただくなど、筆、硯、墨、紙にいたるまで、当時は参考書や入門書もなく入手し難かったので、すべて先生から教えていただいたものです。

何によらず道を極めるとということは奥深く遠いのですが、書道もその通りで、書跡名品叢刊を見てもその膨大なのに驚きます。楷、行、草といつても各書体の中に数多くの古典、法帖があり、隸書にも古隸、八分、木簡。篆書にしても大篆、小篆、石鼓文、また多くの古典ありで、その極まるところがありません。

私はこのところ、展覧会出品作には金文、甲骨文、刻石文などを基調として、自分では草篆とか狂篆といって書いています。最近では展覧会でちらほら見られるようになりました。

習い始めて3年で県展に初出品、それから東京書道展にも出品。島田先生門下では10名近くが各展覧会に出品するようになってきたので、当時の先生のおもな教室が尾島公民館、尾島町役場、宝酒造などのクラブだったので、それぞれ教室は別でも諸行事は一緒に、そして先生を会長にひとつの会を作ろうということになり、いまの「幽蘭書会」ができ、その初代理事長に私が選ばれました。以来毎年1回会員展を開催、今年9月に28回展が終ったところですから28年前、私が42歳の時でした。

当時は作品の搬入・搬出を自分たちで行い、東京展出品には上野美術館まで持っていったものでした。いまでは作品を書いて送れば表装から何まで金さえ出せば、業者がやってくれるので、大変楽になりました。

現在会員は、公募展では毎日展、東方展、県展、県教育展、東京展。会員展では幽蘭書会展を始め、各市町(太田市、新田町、尾島町、境町)の文化展に出品、書道を通して各地域文化の向上に活躍しています。

幽蘭書会ができて10年、1期2年の理事長を再度引き受けたのは52歳の時でした。そしてまた昨年、私としては3回目の理事長を受けることになり、現在その2年目、70歳になりました。

いまはあっちこっち5つの教室で、大人ばかり計30名ほどが私を待っていてくれるといった書とのかかわりです。(つづく)



会員投稿

書と私(4)

太田市 永沼 進

最後に、10年前になりますが、太田市制40周年記念協賛事業として、太田市民会館展示ホールで、昭和63年9月28日から10月2日まで開催した「還暦記念書作展」の作品集に、島田先生が書いて下さった巻頭の言葉を紹介させていただき、終りにいたします。

翁舟さんの個展に寄せて

このたび、幽蘭書会役員、永沼翁舟さんが還暦の個展を開くことになりました。人生の節目として、大変に喜ばしい意義のある行事です。

翁舟さんは、元タカラビール工場に勤務されていて、工場内のクラブ活動として、書道部が、タカラビール発売と同時に開講されました。

その書道部の指導として依頼を受けたのが出会いの始めて、翁舟さんとは30余年の師弟関係に結ばれてまいりました。

翁舟さんは書の外に絵画もよく修得されており、美に対する造詣は非常に深いわけです。最も得意とするところの古文、象形、秦篆をよくされ、一字書から篆刻まで、幅広く習得されています。

幽蘭書会の大幹部で、理事長には再度推されて、会の運営企画、後進の指導にも温かい情熱をもって当られてこられました。

おそらく個展作品にもこれら技術面の外に、人間性豊かな表現が盛り込まれた楽しめる作品展であることを期待しております。ますますの健筆を祈ってやみません。

幽蘭書道会会长 島田 芝香

ちなみに、幽蘭書会の名称の由来は、先生が中国の陶淵明の詩の中から「雑草の中、蘭がひっそりとゆかしい薰りを含んで咲いている」というところからつけた名称です。(おわり)

